

藤田湘子の三十句 野本京 選

令和八年一月一日（2026.01.01）

愛されずして沖遠く泳ぐなり 『途上』 27

枯山に鳥突きあたる夢の後 『狩人』 168

孔雀まで吹かれて来り春の暮 182

鯉老いて真中を行く秋の暮 『春祭』 223

ふるさとの海は鳴る海蓬餅 『去来の花』 356

子規ほどの根気はあらず白團扇 404

戦争が過ぎ風が過ぎにけり 445

なべて足り男子がなし年逝くも 454

家を出て家に歸りぬ春の暮 『前夜』 575

娘へ

椎の實が降るはれと愛されよ 585

湯豆腐や死後に褒められようと思ふ 603

水母にもなりたく人も捨てがたく 『神楽』 609

ゆくゆくはわが名も消えて春の暮 613

闊歩して詩人にならうねこじやらし 631

梟が啼けば荒野へ還るわれ

6
3
2

天山の夕空も見ず鷹老いぬ

6
4
3

春の鹿幻を見て立ちにけり

6
4
6

雪の夜のしづかな檻の中にをり

『てんてん』

6
7
5

時間からこぼれて冬のしじみ蝶

6
7
6

春の暮死んでから読む本探す

6
8
1

死者とまだ訣れてをらず白木槿

6
8
4

今を在る者が愛弟子冬木の芽

6
9
5

枯山へわが大声の行つたきり

7
0
5

虎落笛わがのどぶえを誘ふなり

7
0
6

麦穂波父と娘といふ構図

7
1
0

鷹孤り夏夕ぐれの避雷針

7
1
1

六月六日、飯島晴子忌

螢火忌のいつこの闇に居給ふや

7
1
1

狐火の傳くならば彼岸まで

7
1
5

文藝に修羅無くなりぬみやこ鳥

7
1
7

木蓮の声なら判る気もすなり

7
1
9